

2020年3月期
第3四半期決算報告
(2020年2月5日)

 **日清食品ホールディングス株式会社**
(2897)

EARTH FOOD CREATOR



- ただ今、ご紹介に預かりましたCF0の横山でございます。
- 本日13:15に東証適時開示情報および弊社HPにて発表いたしました、第3四半期決算について、ご報告申し上げます。
- お手元に「2020年3月期 第3四半期決算短信[IFRS]（連結）」、「2019年度（2020年3月期）第3四半期決算 補足資料」、「2020年3月期 第3四半期決算報告」をご用意ください。
- 主に「第3四半期決算報告」を使ってご説明しますので、よろしくお願いいたします。

エグゼクティブサマリー		1
2019年度 経営方針	<u>環境変化に対応した施策を確実に執行し収益力の強化に努める</u>	
	国 内：価格改定でコスト増の向かい風を跳ね返し収益基盤の安定化を図る 独創性の高いブランド戦略で売上拡大と利益創出を目指す 関西工場(日清食品)の生産性向上を早期実現し、将来の利益の礎とする 海 外：米国における構造改革(価格改定、コスト削減、商品ポートフォリオの見直し)を断行し、早期に利益改善を すすめる 中国における安定的な成長を継続する インド、インドネシアの早期黒字化を目指し、ブランド強化と収益力の強化に取り組む 全 体：グループを挙げてコスト削減に取り組み、経営基盤の強化に努める	
第3四半期 の 振り返り	連 結：増収・増益(営業利益、親会社の所有者に帰属する四半期利益) 国 内：増収・減益 ・ 即席めん事業：6月の価格改定が順調に浸透し日清食品・明星食品共に増収。原材料費、物流費の上昇に加え、日清食品関西工場稼働による償却費増の影響を跳ね返し増益。売上・利益ともに期初計画の想定内で着地 ・ 低温事業：増収・減益 ・ 菓子・飲料事業：減収・減益 ・ 国内減益の要因として前期第1四半期で計上した固定資産売却益52億円の影響が大きい 海 外：増収・増益 ・ 米州地域：米国事業の業績回復。ブラジル事業、メキシコ事業の好調が続き、増収、大幅増益 ・ 中国地域：増収・増益。特に大陸における増収が利益増に貢献 ・ アジア地域：タイが貢献し増収。営業利益はタイ・インドネシアが貢献し増益。持分法による投資利益増も増益に貢献	
	第3四半期 総括 連結全体で業績は好調 国内事業は即席めん事業が好調 海外は全セグメントで増収増益	

- ・ スライド1をご覧ください。エグゼクティブサマリーになります。
- ・ 今年度は、環境変化に迅速に対応し、必要な施策を確実に執行し収益力の強化により業績のV字回復に努めております。
- ・ 国内事業では、即席めん事業において、価格改定が順調に浸透したことで増収となりました。また、原材料費、物流費の上昇に加え、日清食品の関西工場稼働による減価償却費増の影響を跳ね返し、増益となり、売上収益および営業利益ともに期初計画の想定内で着地いたしました。
- ・ 海外事業は、米国の業績回復、中国、ブラジルの安定的な成長に加え、アジア地域の業績改善したことで、全セグメントにおいて増収増益となりました。
- ・ その結果、連結全体の第3四半期の業績は、増収増益となり、好調に推移しております。

(単位:億円)

	2019年度			2018年度
	第3四半期	前期差異	前期比	第3四半期
売上収益	3,480	+113	+3.4%	3,368
営業利益	355	+8	+2.2%	348
親会社の所有者に帰属する 四半期純利益	256	+9	+3.8%	247
営業利益率	10.2%	▲0.1pt		10.3%
親会社の所有者に帰属する 四半期純利益率	7.4%	+0.0pt		7.3%

EARTH FOOD CREATOR



- スライド2をご覧ください。
- 第3四半期の実績サマリーになります。
- 売上収益は、前期比113億円増収の3,480億円となりました。
- 営業利益は、前期に不動産売却益52億円を計上していることもあり、前期比8億円増益の355億円で着地しました。
- 親会社の所有者に帰属する四半期利益は、前期比9億円増益の256億円で着地しました。

セグメント別 売上収益実績

3

(単位:億円)

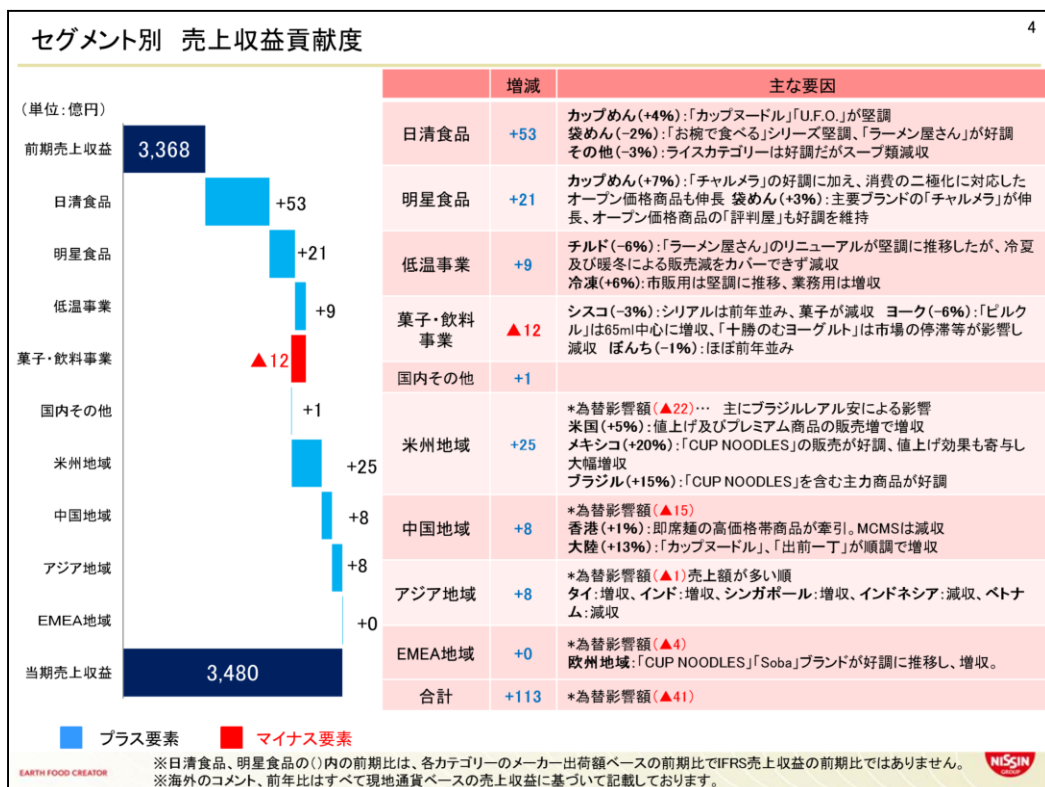
	2019年度			2018年度 第3四半期
	第3四半期	前期差異	前期比	
即席めん事業	1,777	+74	+4.3%	1,703
日清食品	1,508	+53	+3.6%	1,455
明星食品	270	+21	+8.5%	249
低温事業	429	+9	+2.0%	420
菓子・飲料事業	309	▲12	▲3.8%	321
国内その他	32	+1	+2.2%	31
国内 計	2,547	+71	+2.9%	2,476
米州地域	485	+25	+5.4%	460
中国地域	312	+8	+2.7%	303
アジア地域	85	+8	+11.1%	76
EMEA地域	52	+0	+0.8%	52
海外計	933	+42	+4.7%	891
連結売上収益	3,480	+113	+3.4%	3,368

※中国地域の実績は、日清食品HDの連結方針に基づくもので、香港日清の開示とは異なる可能性があります。

EARTH FOOD CREATOR



- スライド3をご覧ください。セグメント別売上収益の実績です。
- 国内全体としては71億円増収の2,547億円、海外が42億円増収の933億円で着地しました。為替の影響を除くと83億円の増収となります。



- スライド4をご覧ください。各セグメントの詳しい売上収益の増減要因を記載しています。
- 日清食品は、売上収益が1,508億円と前期比53億円の増収となりました。カップめんでは主力ブランドの「カップヌードル」「U.F.O.」が堅調で、前期比+4%の着地となりました。袋めんは、「お椀で食べる」シリーズが堅調に推移したものの、袋めん全体としては前期比-2%で着地しました。その他カテゴリーは「カレーメシ」などのライスカテゴリーは好調であったものの、スープ類と合わせると減収で着地しています。
- 明星食品は、270億円と前期比21億円の増収となりました。カップめんでは「チャルメラ」の好調に加え、オープン価格商品も伸長し、前期比+7%の着地となりました。袋めんは、「チャルメラ」が伸長し、オープン商品の「評判屋」も好調を維持し、袋めん全体としては前期比+3%で着地しています。
- 低温事業につきましては、チルド事業は、「ラーメン屋さん」のリニューアルが堅調に推移したものの、冷夏及び暖冬による販売減をカバーできず、6%の減収で着地しました。また、冷凍事業は市販用は堅調に推移し、業務用も増収したことで、6%の増収となりました。この結果、このセグメントの売上収益は429億円となり9億円の増収となりました。
- 菓子・飲料事業は、日清シスコが、シリアル事業は前年並みとなった一方で、菓子事業が減収となり、3%の減収となりました。日清ヨークは、基幹ブランドの「ピルクル」の売上は順調であったものの、「十勝のむヨーグルト」は市場の停滞等が影響し、6%の減収となりました。ぼんちは、ほぼ前年並みで着地しており、このセグメント全体としては、12億円減収の309億円を着地しています。
- 米州地域は、25億円増収の485億円となりました。為替の影響22億円を差し引いた実質的な伸びは46億円となります。米国は値上げおよび高価格帯であるプレミアム商品の販売増により増収。メキシコは「CUP NOODLES Intenso」、「U.F.O.」の好調に加え、値上げ効果も寄与し大幅増収。ブラジルは「CUP NOODLES」を含む主力製品の好調により増収で着地しています。
- 中国地域は、8億円増収の312億円の売上収益となりました。為替影響15億円を差し引いた実質的な伸びは23億円でした。香港は高価格帯商品の即席めんを中心に販売を伸ばしたものの、卸売り事業のMCMSが減収したため、全体では1%の増収となりました。大陸では「カップヌードル」、「出前一丁」などの主力商品の販売が順調で13%の増収で着地しています。

(次ページにつづく)

セグメント別 営業利益実績

5

(単位:億円)

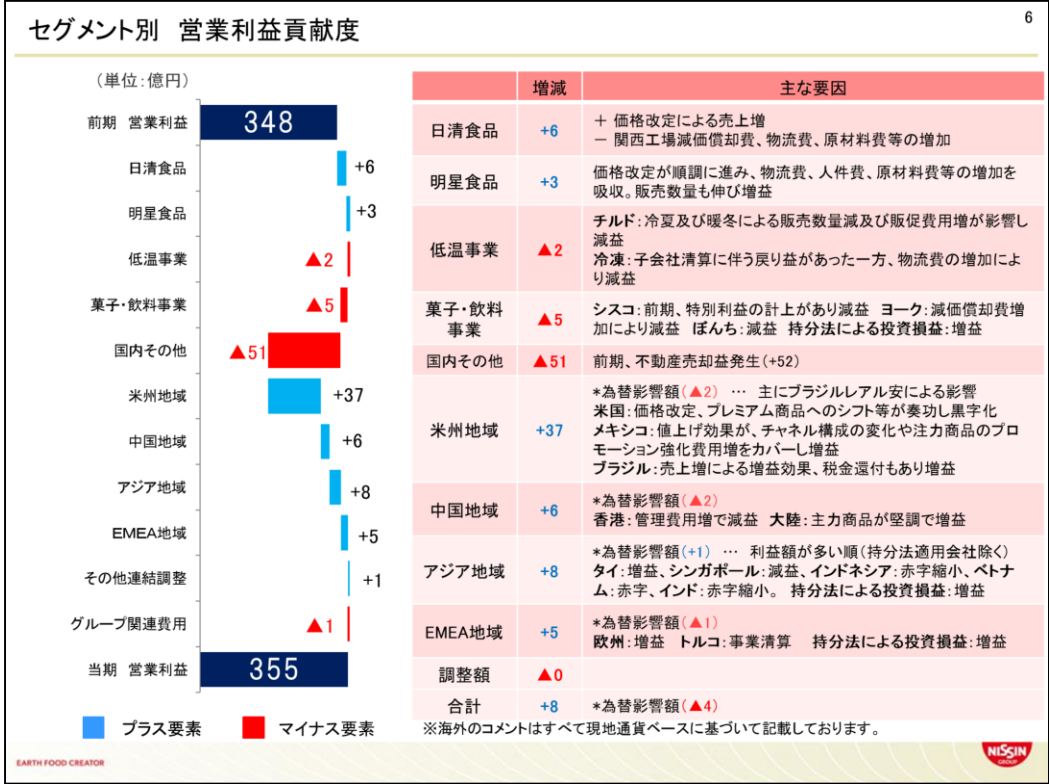
	2019年度			2018年度 第3四半期
	第3四半期	前期差異	前期比	
即席めん事業	248	+10	+4.0%	239
日清食品	224	+6	+3.0%	218
明星食品	24	+3	+14.4%	21
低温事業	15	▲2	▲11.7%	17
菓子・飲料事業	16	▲5	▲24.9%	21
国内その他	13	▲51	▲80.3%	64
国内 計	292	▲49	▲14.4%	341
米州地域	36	+37	—	△1
中国地域	30	+6	+26.4%	24
アジア地域	27	+8	+42.6%	19
EMEA地域	12	+5	+74.0%	7
海外計	105	+57	+117.1%	49
その他連結調整	△1	+1	—	△2
グループ関連費用	△40	▲1	—	△39
連結営業利益	355	+8	+2.2%	348

※中国地域の実績は、日清食品HDの連結方針に基づくもので、香港日清の開示とは異なる可能性があります。

EARTH FOOD CREATOR



- アジア地域は、8億円増収の85億円の売上収益となりました。為替影響は軽微でした。特に、タイでの10バーツ袋めん商品が引き続き好調でアジア地域を牽引しています。インドでは営業体制強化の効果もあり、袋めん・「CUP NOODLES」ともに好調で増収に貢献しました。シンガポールは増収となった一方で、インドネシア、ベトナムは減収でした。
- EMEA地域は、前年並みの52億円の売上収益となりました。為替影響4億円を差し引いた実質成長は前年比4億円となっています。欧州地域は、「CUP NOODLES」、「Soba」が引き続き好調に推移し、増収となっています。一方、セグメント全体では、前期トルコ事業を清算し、為替影響もあり、前年並みで着地しています。
- 続きまして、セグメント別の営業利益について、スライド5をご覧ください。
- 国内は、49億円減益の292億円で着地しました。この中には特殊要因として前期の第1四半期に計上した国内その他における不動産売却益52億円と、今期計上している子会社の固定資産減損4億円、低温事業で計上している関係会社の清算に伴う戻り益5億円が含まれています。
- 海外は、57億円増益の105億円で着地しました。
- そこに、グループ間調整費などのマイナス41億円を合算した355億円が、当第3四半期の営業利益となりました。



- 続いて、セグメント別の営業利益の増減要因をご説明します。スライド6をご覧ください。
- 日清食品は、6月に実施した価格改定による増益効果はあったものの、関西工場の減価償却費、物流費や原材料費の高騰などの影響もあり、営業利益は6億円増益の224億円となりました。
- 明星食品も同様に6月の価格改定が順調に進み、物流費、人件費、原材料価格高騰の増加を吸収し、3億円増益の24億円となりました。
- 低温事業は、チルド事業が冷夏と暖冬による販売数量減に加え、販促費用が増加したことで、減益となりました。冷凍事業は子会社清算に伴う戻り益5億円の影響があったものの、物流費の増加などにより減益となりました。セグメント営業利益は2億円減益の15億円となりました。
- 菓子・飲料事業は、日清シスコが前期に特別利益を計上した反動で減益となりました。日清ヨーク及びぼんちは、減価償却費増の影響もあり減益となっています。また、持分法による投資損益は増益で着地しました。セグメント営業利益は5億円減益の16億円となりました。
- 国内その他では、前期に不動産売却益が52億円発生し、また、今期に子会社の固定資産減損4億円を計上したことで、営業利益は前期比51億円減益の13億円となりました。
- 米州地域は、37億円の増益となり、営業利益は36億円となりました。為替の影響2億円を引いた実質的な伸びは40億円となります。
- 米国では、値上げの効果、プレミアム商品へのシフトやコスト削減等が奏功し、黒字化を継続しています。
- メキシコは、値上げ効果が、販売チャネル構成の変化や注力商品のプロモーション強化の費用増をカバーし、増益で着地しています。
- ブラジルは売上増による増益効果に加え、過年度の税金還付もあり増益で着地しています。
- 中国地域の営業利益は、6億円増益の30億円となりました。為替の影響2億円を引いた実質的な伸びは8億円となります。香港、大陸共に主力商品の多くが安定的に成長しており、大陸は増益でしたが、香港は管理部門強化による費用増により減益で着地となっています。

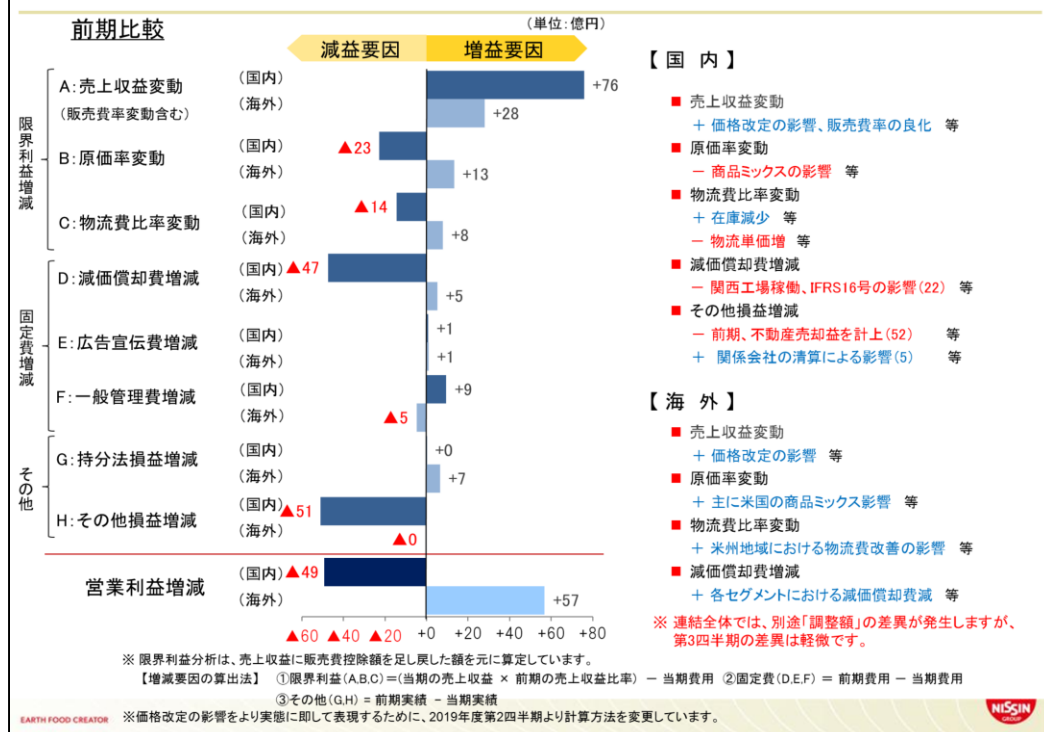
(次ページにつづく)

営業利益の主な差異要因(非経常損益の影響)					7
	2019年度 第3四半期	2018年度 第3四半期	営業利益 差異	非経常損益 差異	(単位: 億円) 非経常の主な内容
日清食品	224	218	+6	▲0	
明星食品	24	21	+3	▲0	
低温事業	15	17	▲2	+5	(19) 関係会社の清算による影響+5
菓子・飲料事業	16	21	▲5	+1	
国内その他	13	64	▲51	▲56	(18) 不動産売却益+52 (19) 固定資産減損△4
国内 計	292	341	▲49	▲51	
米州地域	36	△1	+37	▲0	
中国地域	30	24	+6	+1	
アジア地域	27	19	+8	▲3	(18) 固定資産売却益+3
EMEA地域	12	7	+5	+1	
海外 計	105	49	+57	▲0	
その他連結調整	△1	△2	+1	▲0	
グループ関連費用	△40	△39	▲1	-	
連結営業利益	355	348	+8	▲52	
※「非経常損益の主な内容」に記載の数値について: +益、△損					

- アジア地域の営業利益は、8億円増益の27億円で着地しました。為替の影響は軽微でした。特にタイでは10パーツで販売されている袋めん商品が引き続き好調なこと、またアジア圏の生産拠点として工場の稼働も安定したことが増益につながりました。シンガポールは前期に不動産売却益を計上したことにより減益、またインドネシアとインドは赤字が縮小しています。ベトナムについては赤字となっています。また、このセグメントの持分法による投資損益もプラスとなっています。
- EMEA地域の営業利益は、前期比5億円増益の12億円で着地しています。為替の影響は軽微です。欧州事業および持分法を適用しているロシア事業ともに増益となっています。
- 尚、持分法による投資損益の状況につきましては、補足資料の5ページに記載がありますので、併せてご確認ください。
- スライド7には、非経常損益の影響を考慮した資料を用意いたしました。コメントを4点入れております。内容は基本的にはこれまでにご説明した通りです。

第3四半期 営業利益 増減分析 / 連結（国内・海外）

8



- ・ 続きまして、営業利益の費用別増減分析です。スライド8をご覧ください。
- ・ まずは、国内の分析から説明いたします。
- ・ 価格改定の影響による売上増と販売費率の良化により76億円の利益増、原価率変動は23億円の減益要因となっています。
- ・ 物流費比率の変動による影響は、在庫保管料の上昇と物流単価の上昇が響き、14億円の費用増となっています。
- ・ 減価償却費は、47億円の費用増となりました。このうち22億円は国際会計基準IFRS16号適用の影響によるもので、実額が22億円増えたわけではなく、原価、一般管理費などの負担もこの結果減っています。
- ・ 最後に、その他損益増減で、51億円の利益減になっていますが、これは前年度に計上している不動産売却益52億円に加えて、本年度に計上している関係会社の清算による戻り益5億円の影響等によるもので、それ以外は前年並みの着地となりました。
- ・ 続いて、海外についてご説明いたします。
- ・ 売上増による増益要因が28億円となっています。この増加の主要因は米州地域における価格改定の影響によるものです。
- ・ 原価率変動による影響は、13億円の利益増加になっています。この増加の主要因は米国における商品ミックスの影響によるものです。
- ・ 物流費比率の減少による利益増加は8億円ですが、これは米州地域における物流費改善の影響が主要因です。
- ・ 減価償却費の5億円の費用減は、各セグメントにおける減価償却費額の減少によるものです。
- ・ 以上にて、2020年3月期第3四半期の決算概要についての説明を終わらせていただきます。

この資料に掲載しております当社の計画及び業績の見通し、戦略などは、発表日時点において把握できる情報から得られた当社の経営判断に基づいています。あくまでも将来の予測であり、「市場における価格競争の激化」、「事業環境をとりまく経済動向の変動」、「為替の変動」、「資本市場における相場的大幅な変動」他、様々なリスク及び不確定要因により、実際の業績と異なる可能性がございますことを、予めご承知おきくださいますようお願い申し上げます。

- このプレゼンテーション資料は、PDF形式で当社ウェブサイト「決算説明会関連資料」に掲載しています。
<https://www.nissin.com/jp/ir/library/>
- この資料の金額は、億円単位未満を四捨五入して表示しているため、内訳と合計金額等が合わない場合があります。
- 当該資料の決算期は原則として、2019年4月1日～2020年3月31日を「2019年度」とします。
- 売上収益・利益の「増減率」は決算短信と同じ±%表記を適用しています。
- 資料中の三角表記について、絶対値のマイナスは△、増減のマイナスは▲で表記しています。
- 海外の関連会社の収益・費用は累計期間の期中平均為替レートを適用しています。
- 中国地域の実績は、日清食品HDの連結方針に基づくもので、香港日清の開示とは異なる可能性があります。また、中国地域の事業計画は日清食品HDが独自に設定した目標です。



日清食品ホールディングス株式会社